[調查概報]

千葉市加曽利町 兼坂古墳発掘調査概報

後藤和民

1 発掘の動機

昭和41年4月、千葉市都町980番地在住の須藤 覚氏は、加曽利町925番地で同家が経営する鶏舎 を拡張増築するため、隣接する畑地を小型ブルト ーザーで削平整地をおこなった。その最中に、組 合式箱形石棺の蓋石が露出し、そのうちの1枚が 割れて棺内に落ちこみ、中をのぞくと、棺内に数 体の人骨が比較的よく残っていたという。須藤氏 は早刻工事を中止し、その状況を県の社会教育課 に通報し、その文化財係から市の社会教育課に 絡があった。そして、「近く加曽利貝塚博物館が 開館することでもあり、そのすぐ近くの千葉市内 の遺跡でもあることだから、将来の展示のために、 埋葬人骨だけでも取り上げて置いたらどうか」と の指示があった。

当時、加曽利貝塚博物館の開館準備に専念していた筆者は、この通報を受けて直ちに現地に急行してみた。すでに石棺の上を覆っていた表土や封土は削り取られ、周辺も石棺上蓋の面で水平にならされていた。墳丘や覆土は失なわれているが、周辺部の地形から推察して、周溝が残っている可能性があり、主体部もほとんど原形を保っている。この程度なら、まだ墓壙や石組の構造などの埋葬形態や、周溝の確認による墳形やその規模の把握ができそうである。ただ人骨だけを取り上げるために、この可能性を放棄するのは極めて勿体ないと思われた。

地主の須藤氏と相談したところ、養鶏業の経営のためには、ぜひとも鶏舎の拡張が必要である。あとの崇りが恐いので、ぜひ市の方で徹底的に発掘してほしい。それに必要なら削平工事を1~2カ月延期しても構わないという。そこで、市の社会教育課で緊急調査費をねん出し、急拠、発掘の態勢を整えたのである。

Ⅱ 調査態勢および調査期間

1. 調查担当者

調査主体 千葉市教育委員会 調査主任 加曽利貝塚博物館準備室学芸員 後藤和民

調 査 員 市川市教育委員会・熊野正也 明治大学学生・平田美智子・小池 公子・栗野克己、松尾宜方・天野 努・小穴 臣・安達 新・山口

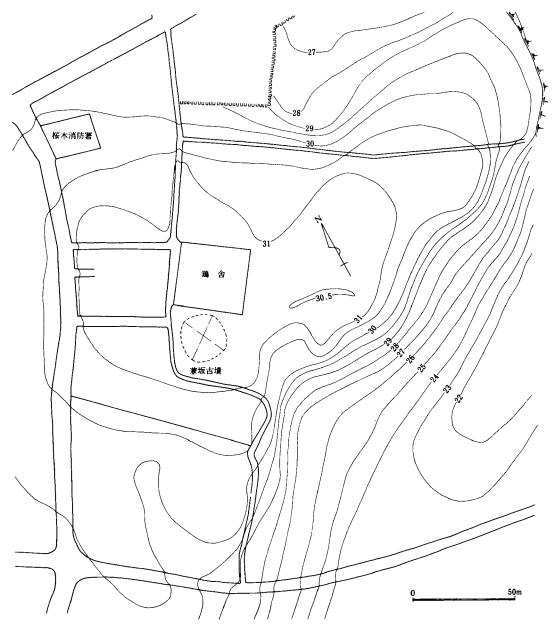
2. 調查期間

- (1) 地形測量調查 5月1日~5月3日
- (2) 周溝確認調查 5月1日~5月15日
- (3) 主体部調查 5月16日~6月15日

Ⅲ 調査の目的

従来、千葉県下においては、竪穴式墓壙埋納の組合式箱形石棺を主体部とする古墳には、なぜか墳丘を伴わないというのが一般的傾向である。現に、千葉市内より発見されている組合式箱形石棺は、地表面ではその存在さえ判別できないような平担地から、造成工事中に発見される例が多い。たとえば、明治年間に開墾中に発見されたという加曽利町の新山古墳群中の1基、昭和2年に市原伝之助氏によって発掘されたという加曽利町辺田前古墳群中の1基、昭和33年、東京電力KKの社宅建設工事中に露出したという松ヶ丘町の古墳、その他大宮町の阿弥陀古墳などが挙げられる。

ところが、これらの古墳が、元来墳丘をもたぬ ものなのか、それとも墳丘部だけが削平されたも のなのか、あるいはその形態・規模。構造および 所属時期などについては、まだなんら把握されて



第1図 兼坂古墳の周辺地形図

いない。とくに千葉市内においては、これらの要件を把握しうるような発掘調査の実例は、この種の古墳に関してはまだ1例もないのである。これは千葉県内においても同じで、このままの状態では、今後においても、この種の古墳は常に造成工事などによる偶然の発見にまつよりほかなく、またそのときには、すでにその大半の要件を失っているので、いつまでたってもその性格は把握できないという結果になりかねないのである。

とくに、千葉市内においては、前方後円填や横 穴が乏しく、少数の大型の円填や方填を除くと、 その大半が小型の円填群である。その中に、この 組合式箱形石棺を伴う古墳が、いかなる位置を占 め、いかなる意義をもっていたかを把握しなけれ ばならない。それには、当然ながらこの種の古墳 の墳墓形態としての実態やその種別やその変遷の 様相が捉えられていることが前提となる。たとえ ば、この種の古墳が、ほぼ古墳時代の後期に属す るものであろうことは予測できたとしても、同じ く後期に属する墳丘を伴う小円形の群集墳との関 係を捉えることは、その実態が不明であるかぎり、 いつまでも不可能なのである。

この古墳の地域研究における盲点を明らかにし、 その解明の糸口を探るためにも、今回の調査は、 ただ主体部のみの発掘に終ってはならない。この 際、限られた予算と人員と期間内とはいえ、われ われはできうるかぎりの探索をおこなう義務があ ると自覚したのである。

Ⅳ 古墳の立地と周辺遺跡

この古墳は、千葉市加曽利町字兼坂と字寒風台の一部にかけて所在する。東京湾に注ぐ都川本谷から複雑に分岐する支谷の1つに、その河口から約3kmほど遡った田向部落から北上する加曽利支谷がある。その支谷の先端は、加曽利中学校の所在する1つの舌状台地を挟んで二又に分れるが、この古墳は、その西側の中学校裏手に反転している谷頭の最奥部に位置している。標高約31mのやや平担な台地縁辺部に立地している。

地元の古老の話によると、この兼坂古墳の周辺には、かつて数基にのぼる円墳群が所在し、その中の最大の規模をもつものは「梵天塚」と呼ばれていたが、明治末年頃、畑地の開墾。整備のために削平され、すべて消滅してしまったという。ただ、この古墳の南西わずか150 mの十字路の1隅に、直径20m前後の小円墳が残っている。俗に、「聖人塚」と呼ばれ、かつて明治年間に埴輪の破けば出土したりまたという。その直角は

片が出土したと云い伝えられている。その真偽は別としても、この台地上一帯には、この兼坂古墳を含めて、一つの古墳群が展開していた可能性は充分に考えられる。(28頁参照)

なお、この兼坂古墳周辺の平担部には、おもに 縄文時代前期(黒浜〜関山式)および後期(堀之 内〜加曽利B式)の土器片がかなり濃密に散在し ている。とくに、本古墳の北東に隣接する舌状台 地(千葉市桜木消防署裏手)の全面においては、 ごく少量ながら土師式土器(鬼高〜国分式)の破 片が散在している。したがって、この古墳や古墳 群と関連した当時の集落が、この周辺に全くなか ったとはいえない。むしろ、この古墳を築いた人 びとの集落を確認するためには、今後、この周辺 部を広範囲にわたって精査する必要があるだろう。

V 調査の概要

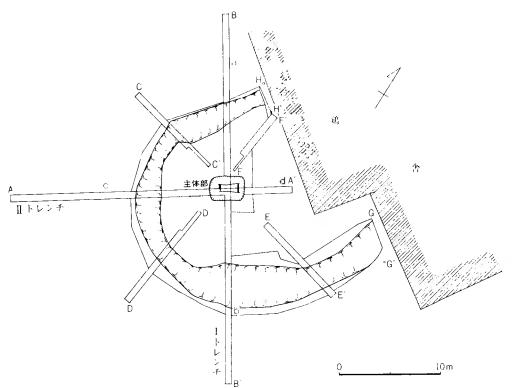
1. 地形測量調査

まず調査班を2班に分け、第1班は兼坂古墳の 立地を正確に把握するため、周辺の地形測量をお こない、第2班は古墳の形態・規模を把握するた め、周溝部の確認調査を担当した。

地形測量は、400分の1の縮尺で、台地部の平 板測量をおこなった。とくに、この古墳の周辺部 の地積は字名を「立木」といい、その名称から、 中世城郭が所在していた可能性を暗示している。 現に、南側の小支谷をへだてて、現在加曽利中学 校の校舎が載っている舌状台地が、俗に「夕霧城」 と呼ばれ、堀切り、土塁、物見台、腰曲輪などの 遺構がある。しかも、その南端の腰曲輪に妙見社 (貴船神社)が所在するので、それが千葉氏に関 連した中世城郭であることは明らかである。伝承 によれば、千葉常胤の長子・胤正は「加曽利冠者 太郎」と称し、この周辺に居城を構えていたとい う。その外郭の関連遺構が、この古墳周辺に残存 する可能性が多分にあるので、まずは、そのよう な後世における地形変更の痕跡を確かめることが 肝腎なのである。

しかし、さいわいなことに、舌状台地の南側縁 辺部において、畑と防風林との境界にある浅い堀 切りと低い土塁状の盛土は、畑地耕作において木 の根などの伸長を防ぐための「根切り」であり、 その他の周辺部には、物見や腰曲輪などの遺構は 全く発見されなかった。

この台地は、古墳の所在する地点をピークとして、北東の方向に向ってわずかに傾斜しているが、その先端部まで、地表面はほとんど平担である。ただ気になるのは、その南側および北東端の側面は、かなり急端な崖面をなしており、その先端部は、周辺の眺望がよくきく地点である。もともとは、さらに象鼻のように突出していて物見台状を呈していた可能性もある。しかし、この先端部は人家の造成のためにすでに削り取られ、その直下にある「じゅんさ池」も、最近つくられた人工の溜池であるという。もはや地形の想像復原さえ困難な状態なので、確実なことは判らない。



第2図 兼坂古墳のトレンチ設定図



第3図 兼坂古墳の全景

なお、この北東に隣接する平担部には、この古墳と同種のものが潜在している可能性が考えられるので、地表面において微細な土砂の盛り上りや作物の色調の変ったソイルド・マークなどが認められないものかと、細心の注意をはらったが、表面的観察だけでは、ついに発見することはできなかった。しかし、この全域に計画的なトレンチを縦横に設置して発掘調査をおこなえば、あるいは同種の古墳を発見することができるかも知れない。なぜならば、聖人塚と兼坂古墳の位置から、この南側支谷に面したこの北東先端部こそ、古墳楽成のための占地として最適の場所だからである。

2. 周溝確認調査

まず、この種の組合式箱形石棺を伴う古墳にも、必ずやその墓域を画する周帯がめぐらされているに違いないという目算をたてた。ただ、それが円形を呈するものか方形をなすものかは全く不明である。その墳形の縄張り(区画)が把握されない以上、主体部の位置づけができないので、この周溝の確認こそ第1の要件となる。

そこで、主体部を中心にその主軸を基準にして、東西・南北および北東一南西、北西-南東(主軸)の方向に、巾1 m長さ25~35 mのトレンチを放射状に設定した。その結果、それぞれのトレンチ内において、巾3~6 m、深さ30~50cmの舟底形を呈し、その中に黒色有機質土がレンズ状に堆積している部分が確認された。しかし、その溝状の落込みはかなり不整形で、その形態や巾や深さなどもまちまちで、しかもブルトーザーの削平により、すでにその立ち上りや掘り込みの旧地表面は不明になっている。これだけの把握によって、直ちに 墳形を予側するのはいささか困難である。

各トレンチの断面を図に記録したのち、これらの溝の部分を結ぶ線上において、トレンチ相互間の現表土(ブルトーザーで剝面された露出面)をさらにていねいに削り取り、その溝状遺構内堆積の黒色土層の上面を露呈してみた。その結果、その溝の北側の一部は、現在建っている鶏舎のためすでにコンクリート敷の下になっているが、これが古墳の主体部を囲続する周溝であることは明白である。この周溝の確認によって、この古墳の縄張りは、周溝の外側で測って長軸約30 m、短軸約20 mのほぼ楕円形を呈し、主体部はその中心より

やや北西よりの位置に、主軸をほぼ北東方に向けて旧地表面から下に埋納されていたことがわかった。

なお、須藤氏の話によると、ブルトーザーで削 平する以前の地形は、たしかに、この周溝が確認 された範囲において30~50cmほどの盛り上がりがあり、周辺部ではもっともレベルが高かった。だからこそ、その土砂を平担にならすためにブルトーザーを頼んだという。さらに記憶をたどってみると、その盛り上がった部分は、かつてはごく低いまかったがって、この古墳であったという。したがって、この古墳も、かつてはごく低いとはいえ、一応墳丘をもった円墳であった可能性が充分に考えられるのである。

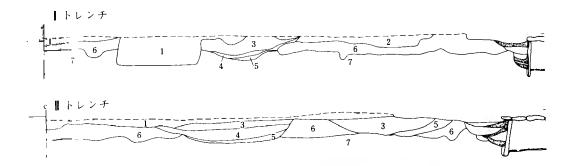
3. 主体部の調査

周溝の確認によって、古墳全体のプランの中における主体部の位置が把握できたので、いよいよ主体部を解剖して、その構造と埋葬形態の調査に取りかかった。まず、その平面的把握や断面的把握を正確に定着するための基準として、主体部を取り囲む4m×6mの「やりかた」を設置して、その測量基点とレベル標準点とした。

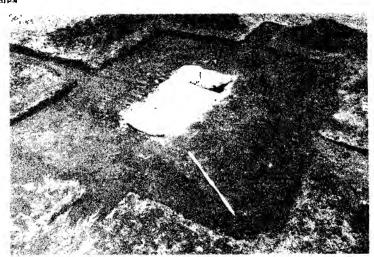
(1) 墓 壙

すでに当時の地表面は、ブルトーザーで削平されて、古墳周辺部においてはどこにも見出すことはできないので、現在の露出面より以下の残存部分の状態を把握するより仕方がない。そこで、石棺の主軸に合わせて設置した南西ー北東および北西ー南東の十字に直交する2本のトレンチによって、墓壙の掘り込みの状況を断面的に把握することからはじめた。

その観察によると、この墓壙は、石棺の形に合わせて、少なくとも3段にわたって階段状に掘り込まれている。旧地表面はいざ知らず、露呈面における第1の区画は約 2.5×3.3 mの隅丸方形のブランで、深さ約30cmほど掘り込まれている。次に約 1.6×2.8 mの隅丸方形で深さ $30\sim35cm$ ほど掘り込まれた第2 の区画がある。そして最後に、巾約20cm、深さ $30\sim35cm$ の細長い溝が、約1 m×2.8 mの方形に掘り廻らされ、その溝の中に石棺



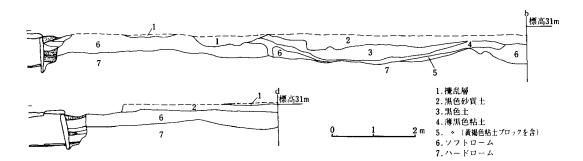
第4図 兼坂古墳のトレンチ断面図



第5図 兼坂古墳の主体部(1)



第6図 兼坂古墳の主体部(2)



の側石や木口石が埋め込まれていた。この3段の 階段状墓壙は、石棺の石材を壙内に運び込み、組 み合わせる作業がやりやすいように考察されたも のと思われる。

しかも、この断面的観察によって、石棺の設置の仕方や、その後の土砂の埋め戻す経過などを明確に捉えることができた。まず、墓壙のもっとも深い底面において、石棺の基底プランが巾の挟い構切りによって決定される。その溝に側石や木口石が組み合わせられたのち、まず、その側石の合せ目に、外側から塊状の「めばり粘土」が厚さるっ10cmほど貼りつけられる。そして、下から粘土とロームとを交互に版築状に敷きつめられ、つきかためられる。それも、おのおの層が内側から外側に向ってやや傾斜するように、わざわざその厚さを変えている。これは、石棺内に雨水などが滲透しないように考察された作意的な処置である

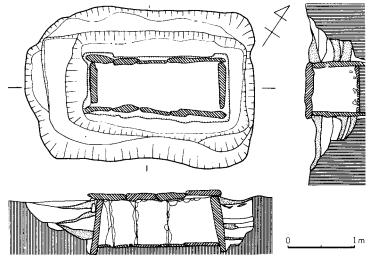
このような2本の直交するト図かような2本の直交する、のような8 面的様相を、での記録に止めてりまる断の記録に止めの記録に正された墓壙の記録に正はない。また、合せれた版築に合せれた版築に合を掘りの土を確立をで、名と同時である。その土を除が崩れるので、組合などが崩れるので、は2 をない、その生物があるの先端がわずか30~35cmほど埋

ことは明らかである。

まっているにすぎないにもかかわらず、その石組 はびくともしない。これは逆に、当時この石棺を 構築する際に、このように底面から側石や木口を 安全に固定してゆかなければ、石組の作業自体が 進行しなかったことを物語っているのである。

(2) 石 棺

この組合式箱形石棺の石材については、埼玉大学地学教室の新井重三助教授に鑑定を依頼した。 それによると、この石材はすべて黒雲母片岩であり、その原産地は筑波山系や長瀞地区のものではなく、むしろ福島県竹貫・御在所地区のものであろうとのことであった。発見したときは、すでに風化が進んでおり、雨水などに濡れると、表面が砂泥状に溶け、それが乾燥すると砂状になって剝落する傾向がみられた。



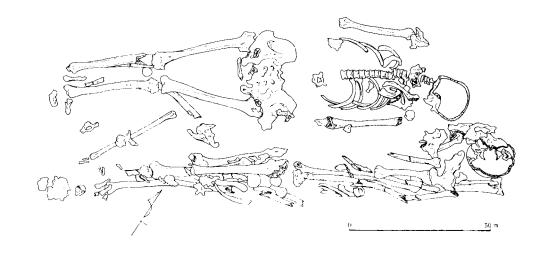
-23-

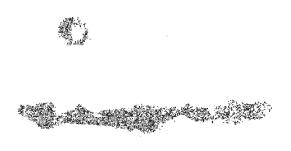
第7図 兼坂古墳の主体部実測図



√ 第8図 兼坂古墳
の被葬人骨

▽ 第9図 兼坂古墳 の人骨実測図





第10図 兼坂古墳出土の副葬品(耳環・ガラス 小玉・刀子)

このような片岩を、厚さ10~20cmの板状に剝離したまま、その剝離面にはほとんど手を加えず、ただその縁辺だけが直線的にすり落され、全体が長方形に整えられている。この縁辺の「面取り」だけは、その接合のためか比較的丹念におこなわれていた。蓋石は4枚、側石は片面に4枚づつで8枚、木口石は両端に大型の一枚石を配し、合計4枚を数える。底面の棺床には、不整形な小型の片岩が数10片用いられていた。

石棺の組合せ方は、まず、墓壙底面に、計画フランとして設定された1 m×2.8 mの長方形に掘り込まれた港の中に、両端の台形を呈する1 枚石

が埋め込まれ、その外側に、両側面の側石が4枚づつ、その上面が水平に揃うように、縦に埋め込まれる。しかも、木口石の台形に合わせて、上縁が底面より多少すぼまるように、やや内側に向って傾斜させる。そして、それらの石の合せ目には内外から多量の粘土塊が詰められる。

このように、井桁状に組まれた木口石や側石によって囲まれた棺の内側の底部には、小型に割れた不整形の片岩が、モザイク状に組まれ、一面に敷きつめられて、それが棺床になっている。すなわち、側石や木口石の底部に比べると、その棺底のレベルはやや高くなっており、いわば「上げ底」状を呈する。これも雨水や地下水等の浸入を防ぐための考察と思われる。

最後に蓋石であるが、長方形を呈し、ほぼ大きさの揃った4枚の板石が、木口石や側石の上縁切口を覆うように、横に並べられていた。しかも、この蓋石の側面はことさらに丹念な面取りがされており、おのおのの合せ目には、ほとんど隙間がない。しかも、この合せ目にも粘土塊が上から貼りつけてあったか、あるいは蓋石全体を覆っていた可能性があり、ブルトーザーで削平した際、この蓋石上からおびただしい量の粘土が搔ぎ取られたという。

(3) 被葬者

棺内には、合計3体の人骨が収納されており、その周辺に、金環1、刀子1、ガラス小玉1個が副葬されていた。後世の盗堀等による攪乱の跡は見出されず、ブルトーザーによる被害もほとんど認められなかった。

頭初、通報を受けて、蓋石1枚が外れた状態で中をのぞいたときは、石棺の内面は、全体が赤色を呈し、白骨化した被葬者の頭部や上腕部の表面までが赤く染っていた。これは石棺の組石全体の内面に、丹か朱が塗られており、それが剝落して下面に付着したものと推察された。ところが、一旦蓋をして、上面をシートで覆い、周辺の周溝や墓壙の確認調査を進めているうちに、棺内が乾燥するにつれて、その赤色はみるみる消えて、蓋石を外して、いざ主体部の調査にかかったときには、その痕跡さえ見られなくなっていた。それは層をなすほどの堆積物ではなく、棺内に浸入していた土の表面が濡れて、全体が赤味を帯びていた程度

で、丹や朱の粒子として取り上げることができなかった。おそらく、棺内覆土や人骨表面における 一時的な酸化現象による発色と思われる。

被葬者は3体であるが、中央に仰臥伸展する1体だけが正常な埋葬姿態で発見され、他の2体は東側側面に片寄せられ、四肢骨が混乱したり、頭位が逆転したりしていた。とくに、1体の年少者と思われる頭蓋骨などは、中央の被葬者の足首のあたりに位置し、その上半身の骨片が残存する位置からみて、かなり移動していることが明らかである。

これは、3体が同時に合葬されたものではなく 各人骨が、3回にわたって順次追葬されたことを 物語っている。すなわち、まず最初に、頭部が逆 転し、もっとも四肢骨の位置が乱れている人骨が 埋納され、その後、最初の人骨を東側に片寄せて 第2の人骨が中央部に追葬された。そして最後に これら2体の人骨がすでに白骨化した時点におい て、両者を東寄りに、しかも頭部と脚部の両方向 に向って上下にふり分けるようにして片寄せてか ら、その中央部に第3の人骨を追葬した。そのと き、第1の人骨の頭部が脚部の方に逆転したもの と思われる。

なお、これらの人骨の年令および性別については、その遺存状態がその鑑定のための条件を満たすほどではなかったため、残念ながら不明である。ただ、最後の被葬者と思われる中央の人骨だけはその頭蓋、四肢骨などの遺存が比較的よかったので、その骨骼や身長などから、成人の男性であろうという、新潟大学解剖学教室の小片保教授の教示を得ることができた。しかし、その正式な調査研究はまだおこなわれていない。

(4) 副葬品

棺内は、 追葬時における前葬者の移動以外には、盗掘などによる攪乱は認められなかったが、 周囲から侵入したと思われる土砂が、人骨の過半 を薄く覆うほどに堆積していた。この土砂を取り 除くに当っては、とくに慎重を期すため、一々丹 念に少量ずつフルイにかけながら精査したにかか わらず、副葬品は意外に少なく、発見されたのは、 わずかに次の3点にすぎなかった。

耳 環 1ケ

第3人骨の左肩部付近の棺底から出土。青銅製

金メッキで、太さ 7×6.5 mmの銅線を外縁径約23 mmの環状に曲げ、その1 方に1.6 mmの間隙をもったもの。表面には緑青が覆い、金メッキも約 $\frac{1}{3}$ ほど剝落しているが、金屋部分の保存状態は良い。

ガラス小玉 1ケ

第2人骨の脚部、あるいは第1人骨の頭骨近くから出土。直径4mm、やや扁平で、中央に直径1mmの小穴があけられたビーズ状のもの。縁色半透明の天然ガラスを加工したものである。

刀 子 1口

第2人骨の腰部付近から出土。全体の長さ150 cm、刃部の長さ8.5 cm、巾107 cm、柄部の長さ6.5 cm、巾1.4 cm、鉄製鍛造で、酸化によって金属質部分はほとんど残っていないが、錆によってわずかに原形を保っているといった状態である。

以上のほかに、直刀や鉄鏃などの腐蝕した跡が 残っていないものかと、覆土の錆状酸化を注意し てみたが、その片鱗さえも発見されなかった。

VI 結語

兼坂古墳は、長軸30m、短軸20mの楕円形を呈する巾約3m以上の周溝によって区画された内側に、竪穴式墓壙の中に箱形石棺を組合せた主体部をもつ古墳で、その棺内には、3体の被葬者が順次追葬された形で安置され、青銅製金メッキの金環1個、ガラス小玉1個、鉄製刀子1本が副葬されていた。

元来、この古墳には、ごく低いとはいえ多少の 盛土があり、墳丘を伴なっていたものと思われる。 だが、その人骨の埋納状態からみて、少なくとも 2回にわたって追葬された形跡があるので、この 種の古墳は、もともと何回も追葬できるように考 案されたものであり、そのためにあまり高い墳丘 はもたなかった可能性が強い。

棺内には、3体も埋納されながら、その副葬品はきわめて貧寒たるものである。これは、被葬者1体に対して副葬品が平均1個という割合になり、そのおのおのの所属が明確ではないから、中には全く副葬品をもたなかった被葬者があった可能性さえある。しかも、元来2個以上の対をなさなければ装身具としての意味をもたない耳環やガラス小玉が各1個づつしか副葬されていない。これは被葬者が生前に身につけていたものを、そのまま

死後の世界にまで持ち込むという思想から隔絶して、その片割れを1個づつ副葬するというのは、 すでに形式化した儀礼的な意味しかなくなってい たことを物語っている。

このような現象から総合して、この古墳が古墳 時代の埋葬形態としては、きわめて末期的な現象 であり、従来の伝統が形式的に受け継がれながら も、全く異質な意義をもちはじめたことを示して いる。とくに、同一棺内における3体もの追葬と いう形態から考えて、血縁を同じくする者の合葬 としか考えられず、すでに階級分化がおこなわれ た特定階層の家族墓的な性格が推定できる。

なお、この古墳の所属時期については、その副 葬品の種類や、それぞれの形態や規模だけによっ ては、にわかに決定することはできない。とくに 呪術的な装身具が多く、武器・武具がないという ことから、比較的古い時期を想定することは、こ の場合誤りである。古墳の生成。発展・消滅の 歴史的過程からみても、この種の古墳が末期的な 形態であり、後期古墳に属することは明らかであ ろう。むしろ、古墳時代後期における墳墓形態の 多様化、地域的変則性として捉え、当時の地域豪 族における身分・階級の分化現象と対応して、そ の性格づけをすることこそ、われわれに与えられ た重要な課題であろう。

しかし、この問題については、この種の古墳の本格的学術調査の類例が必要であり、また、その周辺に存在する小円墳群の発掘調査によって、両者の関連性を把握しなければならない。千葉市を中心とする周辺地域においては、後期の古墳や古墳群が本格的に発掘調査をされた例が極めて乏しい。いまだ個々の古墳の存在意義や価値が把握されていないのに、すでに開発造成によって次々と古墳が消滅しつつある。いまこそ古墳に関する地方史的な調査研究が必要であり、そのためには、その可能性を確保すべき古墳自体の保存処置を講ずることの方が、文化財関係者の急務ではなかろうか。

(千葉市加曽利貝塚博物館・学芸員)